The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	反対動作と動詞の否定辞
Author(s)	加藤, 主税
Citation	Osaka Literary Review. 1971, 10, p. 36-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25724
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

反対動作と動詞の否定辞

加　藤　主　税

1. 序

rich, poor ; old, young ; happy, unhappy ; のそれぞれの形容詞の組はお互いに反対語であり，動詞 dress, undress ; open, shut ; like dislike の組もお互いに反対語であるが，動詞の組は like, dislike を除いては，形容詞の場合と少し様子が違うように思われる。

(1) He is happy.

(2) He is unhappy.

(3) He is not happy.

(4) He opens the window.

(5) He shuts the window.

(6) He doesn't open the window.

(1)〜(6)の文を比較してみると，形容詞の場合は否定と反対語の差が動詞の場合より大きいことがわかる。Jespersen は，(1)あるいは(4)に対して(2)又は(5)を反対辞項と呼び，(3)と(6)を矛盾辞項と呼んでいる。[1] 動作を表わす動詞の場合においては，反対辞項と矛盾辞項の差は特に形容詞の場合と比較して著しく異っていて，複雑であると思われる。そこで次に種々の動作動詞においての反対動作を考えてゆき，人がいかにして複雑な連続体である動作を確認し，言語化してゆくかをみてゆきたい。

2. 反対動作

ここで簡単に動作を中心として動詞を試論的に分類してみよう。

2.1. OPEN, SHUT

まず上にあげた(4)(5)(6)においての動作を考えてみよう。この時 not open と shut, not shut と open とは意味が異なり，open と shut とはお互いに反対語である。そして open と shut とは示す動作が正確に反対である。すなわち He opens the window. という動作を撮映機で撮ってそのフィルムを反対に回して映写したのが He shuts the window. になる。そして，open と shut の動作を一通り行なうと動作を行なう前の状態になる。こういう一組の動詞が典型的な反対動作を意味する。この種のものは動詞の大部分を占める。次のような動詞がこの類に入れられる。

inter, disinter ; dress, undress ; cover, uncover ; curtain, uncurtain ; appear, disappear ; unite, separate ; entrain, detrain ; tie, untie ; seal, unseal ; stand, sit ;

ある動作があれば，いつでも撮映することができ，反対映しにすることができるから，理論的には，どんな動作でも反対の動作はあるはずである。しかしその反対の動作を表わす言語形式がない場合もあるし，反対動作が不可能な場合もあろうし，又，複雑な動作を一つの形式で表わす場合もあり，その反対動作は種々で複雑である。

2.2. JUMP

(7) I jump.

jump の反対動作を考えてみる。(7)の動作を撮映して，反対回しに映写してみると，その反対動作は同一である。つまり jump という動作は，飛び上がり，降りてくる，二つの動作を含んでいる。飛び上がるだけの動作は不可能で，降りる動作が必然的に加ってくる。しかし場合によっては，片方だけの動作もあり得る。つまり飛び上がる動作がそれである。

(8) He jumps up the roof.

(8)は jump の上がる動作だけを up の助けによって表現したものである。

(9) He jumps down from the roof.

(9)はその反対，すなわち降りる方だけを言い表わしたものである。それ

で，(8)の動作を撮映して，反対回して映写すると(9)になる。(9)は(8)の反対動作なのである。up，down という語を用いて反対動作を表わすのであって，jump だけでは表わせない。この種の動詞には反対語がないのは当然であろう。この種の動詞には，くり返しで一つの動作となっている動作を表わす動詞に限られる。dribble，chew (gum)，clap，… がこの種類に入れられる。

2.3. GIVE，TAKE

(10) He gives the book to her.

(11) He takes the book from her.

give と take は二人以上の間の動作であり，(10)(11)は反対動作を表わしている。そして(10)と同じ動作でも視点を変えて，与えられる人を中心として，次のようにも表わすことができる。

(12) She takes the book from him.

(13) She is given the book by him.

(12)(13)は(10)と同じ動作であり，

(14) He takes the book from her.

(15) He is given the book by him.

(14)(15)は(10)の反対動作である(11)と同じ動作である。このように二人以上の人間の間をある物が移動する場合には，同じ動作でも視点を変えることによって，色々表わすことができ，その他にも the book を主語にしても，可能である。しかし意味（動作）をみるならば，(10)の the book が he から she に移る場合と(11)の the book が she から he に移動する二通りの場合しか考えられない。移動する物がはっきりしない場合もあるが，こういう動作を表わす動詞は次のようなものである。　sell，buy ; offer，receive ; lend，bovow ; teach，learn ; …

2.4. GO，COME

次に二つの場所を人が移動する場合を考えてみよう。

(16) I go to the station from home.

(17) I come home from the station.

(17)は(16)に対して結果的には反対動作になるが，(16)の反対回し映写の動作が(17)にはならない。この反対動作を近似反対動作と呼ぶことにする。つまり動作の過程は異っていても，その結果が反対動作の結果と同じになっているものをいう。

(18) I leave the building for my house.

(19) I reach the building from my house.

(19)は(18)に対して，上述の(16)(17)の場合と同様に近似反対動作になる。

(20) I leave the building for the university.

(21) I reach the building from my house.

$$(H) \xrightarrow[\cdots\cdots]{\text{reach (21)}} (B) \xrightarrow[\cdots\cdots]{\text{leave (21)}} (U)$$

(H) house

(B) building

(U) university

三地点が関係すると(20)(21)のようになる。(21)は(20)の反対動作ではないことは図を見れば明らかである。(20)(21)はお互いに関連動作である。

(22) I leave my house for the building.

(23) I reach the building from my house.

$$(H) \xrightarrow[\cdots\cdots\cdots\cdots]{\text{leave (22)}} \xrightarrow{\text{reach (23)}} (B)$$

この場合も，反対動作でなく，関連動作である。往来発着を表わす動詞がこれに属する。 これらは leave, depart, embark, begin, arrive, attain, terminate, end, … である。

2.5. MOVE

(24) He moves the rock.

(25) He fixes the rock.

(25)は(24)の反対動作である。しかし(26)のように副詞句がつくと(25)の反対動

作とはならない。

(26) He moves the rock from the road.

(26)の反対動作は(27)である。

(27) He moves the rock to the road.

2.6. BUILD, DESTROY

(28) He builds the house.

(29) He destroys the house.

(29)は(28)の近似反詞動作である。なぜなら，build は多くの動作を含んでいる。たとえば，build の動作には木やレンガを運び，組み立て，けずり，積み，色をぬり……等の動作が含まれていて，結果的にできたのが house であり，又これを destroy するということは，結果的に house でなくすることだけれども，その一つ一つの動作は，build の反対動作とは異っている。build より destroy の方が単純な動作である。build の動作の反対回しを考えてみれば，このことはよくわかる。現実の動作は複雑な種々の動作の連続体であって，これを記述しようとする言語形式はこれらをそのまま記述することはできなくて，一つの言語形式で，多くの複雑な動作を含んで記述している。故にこの種の反対動作は最終的にできた結果をその動作以前に戻すこと，house を house でなくすことが反対動作なのであり，これは，近似反動作である。この動の動詞はかなり多い。incooporate, discooporate ; establish, disestablish ; earn, spend ; make, destroy ; ……

2.7. CONQUER, SURRENDER

(30) I conquer the enemy.

(30) I surrender to the enemy.

(30)(31)は反対動作でなく，関連動作であろう。この他にもたとえば，produce, consume は consume するために produce であって，原因結果の関係であろうし，punish, forgive は punish か forgive の二者択一の関係で

あり，反対動作とはほど遠い。こういう動詞はかなり複雑なものに多い。connote, denote ; serve, disserve ; invent, imitate ; induce, deduce ; ……

2.8. WALK

(32) He walks.

(33) He walks to the building.

(32)の反対動作はないが，(33)の反対動作はある。

(34) He walks from the building.

(34)は(33)の近似反対動作である。walk のように方向をもたない動詞は，別の語と共同で，反対動作を表わすことができる。 run, swim, rush, creep, fly, hop, step …… がこの種に分類される。

2.9. SMILE

(35) He smiles merrily.

(35)の動作は反対映しにしてもほとんど変わらない。このようなものは反対語がない。laugh, speak, tell, say, shout, cry 等がこれに属する。又その他動作があってもその反対動作が不可能なものは反対語はない。又，動作が複雑なものも反対語はないのである。反対動作を考えることによって，動詞を意味的に上述のように，大ざっぱに分類することができる。それで一般に動作動詞における反詞語とは反対動作か近似反対動作を意味するものである。

2.10. LIKE, DISLIKE

(36) He likes it.

(37) He dislikes it.

(38) He doesn't like it.

like, dislike は動作動詞ではない。この場合は大部分の形容詞がそうであるように，反対辞項である(37)と，矛盾辞項である(38)の間にはほとんど差はない。この種のものは反対語は not を付加したものとして分析できる。

たとえば dislike＝not＋like, doubt＝not＋believe というようである。こういうものは動作を示さなくて，心理的状態を表わすものに限られる。love, hate ; agree, disagree ; approve, disapprove ; obey, disobey ; please, displease ; satisfy, dissatisfy ; believe, doubt, ……がこれに入る。

3. 否定と反対動作

次に否定と反対動作との関係を調べてみることにする。

(39) She is rich.

(40) She is poor.

(41) She is not rich.

(42) She is not poor.

rich に対して not rich は矛盾辞項, poor は反対辞項であり, さらに not rich であり not poor である部分は中間辞項である。そして矛盾辞項は反対辞項より範囲が広く，not poor は rich より，not rich は poor より意味が広い。ここで〔＋rich〕という意味素性を導入することにしよう。そして not は〔－〕の意味素性である。

(43) rich 〔＋rich〕

(44) poor 〔－rich〕

(45) not rich － 〔rich〕 ＝ 〔－rich〕 ＝ poor

(46) not poor － 〔－rich〕 ＝ 〔＋rich〕 ＝ rich

(43)〜(46)が示しているように，(43)と(46)，(44)と(45)とはだいたい意味が等しい。次に同様にして動作動詞について考えてみよう。

(47) He opens the window.

(48) He shuts the window.

(49) He doesn't open the window.

(50) He doesn't shut the window.

open と shut とは反対語であるが，(47)と(50)，(48)と(49)とは，上述の(43)と(45)，

(44)と(45)のようには等しくならない。(49)(50)はそれぞれ(47)(48)の矛盾辞項であるから理論的には(47)，(48)以外をすべて含み，たとえば(49)，(50)は次のようになる。

(51) He { open 以外のもの無限 / break / shut / ⋮ } the window.

(52) He { shut 以外のもの無限 / break / open / ⋮ } the window.

しかしこの場合は He _____ the window という条件がついているから，実際には無限でない。[2] 否定は矛盾辞項を意味するが，この矛盾辞項が，場合によっては色々な意味になる。(51)(52)の文の場合には，動作を行わないこと，すなわち静止を意味すると考えられる。(48)は(47)の反対動作であり，言い換えるなら，動作を始みる以前の状態に戻す動作である。そして(49)は(47)という動作を，又(50)は(48)という動作を始める前の状態なのである。このことを図に表わすと次のようになる。

	open (47)		(A) open 以前の状態
(A)	⟶	(B)	
not open	⟵ shut (48)	not shut	(B) open 以後の状態

(53)※He opens the window for two hours.

(54)※He shuts the window for two hours.

(55) He doesn't open the window for two hours.

(56) He doesn't shut the window for two hours.

(53)(54)が非文なのは open, shut が継続相を表わす動作でないから，for two hours という時間の巾をもった副詞句と共存しないからであり，(55)

(56)が文法的なのは，not open，not shut は上述のように静止を意味じ，故に継続相になり得るからである。一般にどんな相の動詞でも否定は継続相になり，従って時間の巾をもつ語句と共存できる。open と shut の意味素性は〔+movemnt〕が入ってくるから下のような結果になる。

(57) open〔+movement, ……〕

(58) shut〔+movement, ……〕

(59) not open −〔+movement, ……〕=〔−movement, ……〕

(60) not shut −〔+movement, ……〕=〔−movement, ……〕

(59)(60)が示すように，not open も not shut も共に〔−movement〕だから静止を意味するのである。ただしこの場合は〔+movement〕以外の素性についてはふれない。

(61) Don't forget.

(62) Remember

一方は(61)は(62)の意味になる。

(63) remember〔+remember〕

(64) not forget −〔−remember〕=〔+remember〕

(63)(64)のような分析になるからである。

(59) They doubt that I need consider the problem.[3]

(59)は次のように分析される。

(66) doubt〔−belive〕→−〔+believe〕=not believe

このように(59)の doubet には not が含まれていて，この not は need の次に出てくるべきものであり，それ故に need が助動詞として単独に現われるおもしろい例となっている。

(67) Don't walk.

(67)は意味素性を色々考えることによって，色々な条件，環境のもとで，三つの場合が考えられる。

(68) Stop.

最初に，(67)は(68)と書き換えができる。これは walk を〔+movemement〕を考えて，次のように分析した結果生じる。

(69) not walk −〔+movement〕=〔−movement〕= stop

次に(70)の意味になる場合もある。

(70) Run.

これは横断歩道で，人に Don't walk と言われて，ヘソの曲った人が，止まらずに走ったというように解釈する場合である。そしてこのことは walk, run, rush, ……の系列の中での関係としておこる。つまり walk の否定はその系列内での補集合として現われる。walk, run, rush, ……の系列がすべて〔+going〕という意味素性をもっていて，それぞれは(71)(72)(73)のように分析できる。

(71) walk〔+going〔manner Ⅰ (slow)〕〕

(72) run〔+going〔+manner Ⅱ (fast)〕〕

(73) rush〔+going〔+manner Ⅲ (very fast)〕〕

ここで注意することは not walk の not〔−〕は〔+going〕に作用しなくて〔+manner Ⅰ〕に作用する。三番目には walk 以外の無限のことを意味している場合であり，この場合には文脈，環境に大いに関係している。これについての具体的な例が(74)である。

(74) Swim.

(67)が(74)の意味になる場合は，たとえば水泳訓練中に訓練者が発する時である。

(75) Eat.

又，(74)の意味になる場合もあり，これは教室で，子供達が食事中に立って歩いているのを見ての教師の発語である。(73)や(74)の意味になる場合はいずれも発言の大巾な省略がある。というのは walk 以外になんでもいいのであり，walk 以外という消極的な意味しかもたないので，あとは文脈にたよるしかないのであるから。たとえば(75)は(76)の省略である。

(76) Don't walk. (Sit bown.) (Eat.)

ここで（　）内は省略部分である。

否定ということは，補集合を意味し，形容詞あるいは状態動詞においては反対概念とたいした差異はないが，動作動詞においては，全集合を何とみるかによって，否定の意味が異なるのである。つまり動作があるかないかに視点をおいてみるならば，動作がある場合とない場合の二通りしかなく（〔+movement〕，〔−movement〕），否定はそのうちどちらかに決って，〔−movement〕（静止）になる。又，系列動作（walk — run — rush ……）においては，補集合はその範囲の中でなされ，なにも限定がない場合に，消極的な意味をもつ時は，かなりの発言の省略がされているのである。

4. 動詞の否定辞

現代英語においては，動詞の否定辞として dis-, un-, mis-, だけであるが，mis- は否定辞とは言えないので，dis-, un- だけを考えることにする。dis は語原的には否定，反対，分離，欠性等を意味していたが，動作動詞につくのは欠性の意味の否定辞だけである。これを欠性否定辞という。又，un- は not の意味の否定辞（not 否定辞）と欠性否定辞に分けられ，動詞につくのは，欠性否定辞だけである。つまり，dis- も un- も，動作動詞につき得るのは欠性否定辞だけであり，一方形容詞あるいは状態動詞には not 否定辞がつく。dis- あるいは un- の否定辞が，矛盾概念というよりむしろ，反対概念を意味するので，形容詞，状態動詞にあっては，反対概念が否定概念の意味に近くなるためであり，(unhappy, dislike)，動作動詞にあっては，反対概念は反対動作のことであり，これは否定概念の意味とはほど遠い（undress, disestablish）ためである。次に dis- と un- の違いについて考えてみよう。

un- が純粋な欠性の意味しかもっていないのに対し，dis- は語原的に反対，分離，欠性，否定の意味があり，living prefix として欠性の意味だ

けになったとしても，状態動詞について not 否定辞の役割をしているが，un- は状態動詞につくことはできない。(dislike, disbelieve, displease, discourage, distrust, disfavour, disallow, disaffirm, disagree, dissatisfy, ……)

又，dis- より un- の方がより living である。言い換えると dis- は確立された語として多く存在し，un- は確立されていない語に多い。したがって，同じ語根に dis- と un- がついた場合は，discover と uncover の意味の違いをみれば明白である。さらに un- は unbotton, unclothe, undress, uncurtain, unfasten, unknot, unfold, unlock, unmask, unpack, unseal, untie, unveil, ……が示すように，かくれたものを外に出す，開く，はずす，ほどく等の意味になるものが多い。一方 dis- は disappear, disarm, disestablish, disarrange, disasemble, disconnect, discrown, disenchant, disforest, disharmonize, disinter, disimprison, disunite, ……の例が示すように，いったんしたものをもとに戻すとか，作ったものをこわすという意味になるものが多い。しかし，un- にもこの dis- と同じ意味のものもある。(uncurl, unlern, unmake, …)

又 dis- と un- のついた動詞が同じような意味を表わすのもある。(disburden, unload ; disentangle, untangle ; disremember, unlearn ;)

6. 否定辞派生の制限

dis-, un- はかなり自由に多くの動詞について派生語をつくることができる。それらは臨時語として考えられるものもあり，辞書にものっていないものも多い。しかしすべての動詞につくのではなく，ある制限があると思われる。動作動詞に否定辞がつくことは，反対概念を意味し，つまり反対動作を意味する。それである動作があれば，必ずその反対動作はあるはずであるが，反対動作が不可能が (eat, drink 等)，あるいは無意味か，表現する価値や必要のないもの (work, play, swim 等)，又は一つの動作が既に反対動作を含んでいるもの (jump 等) のものは，反対語あるい

はその言語形式がないのは当然である。言い換えれば，否定辞派生ができない。しかし厳密な反対動作は存在しないが，近似反対動作はあるという語は多い。つまりある動作をおこし，動作以前の状態から，ある過程を通って動作の結果に至る時，その過程を通らずにただその動作の結果を動作以前の状態に戻すという一種の反対動作なのである。否定辞派生はこの制限以外にも存在すると思われる。

Jespersen[4] や Zimmer[5] は形容詞の un- 派生の制限について研究している。Zimmer は形容詞をその概念にそって，次の三つに分類している。

i) positive term : good, intelligent, healthy, fine, beautiful, brave, honest, ……

ii) negative term : bad, stupid, sick, cruel, treacherous, horrible, ……

iii) neutral term : smooth, rough, regular, sporadic, ……

そしてこのうち， un- は ii) negative term とは拒絶反応を示すと言っている。このことは動詞についても言えるようである。positive term の動詞は次のようなものである。

(77) believe, make, dress, affirm, remember, learn, continue,

(77)にそれぞれ dis- か un- をつけて派生語を作ると(78)になる。

(78) disbelieve, unmake, undress, disaffirm, disremember, unlearn, discontinue,

そして(78)は(79)と同じ意味であり，(79)は negative term の動詞である。

(79) doubt, destroy, strip, deny, forget, stop

(79)は(80)のように否定辞と拒絶反応を示す。

(80) ※disdoubt, ※disdestroy, ※disstrip, ※disforget, ※disstop, ※undoubt, ※undestroy, ※unstrip, ※unforget, ※unstop

しかし unloose の場合の否定辞 un- は二重否定と同様に， 二つの否定で一つの否定を表わすのであって，肯定にはならない。[6] だから動詞において

も，形容詞の場合と全く同様に，negative term の動詞には拒絶反応が認められる。これは dis-, un- の欠性（privative）の意味を考えてみれば，形容詞の場合よりも当然だと思われる。destroy という例をとってみると明らかである。つまり destroy の結果によって，生じたものはないので，この語に欠性否定辞の dis-, un- がつくはずがない。

(81) I eat apples.

(81)の結果 apple がなくなる。つまり，dis-, un- はつかないのであり，この意味で eat は上述の分類によれば negative term に属する。ある動作によって，ある物を生じさせるような動詞には dis-, un- はより多くつき易いと言うことができる。次に Zimmer は形容詞の否定辞派生についての次の制限を述べている。[7] -al, -ant, -ent, -ic, -ous 等の派生語尾をもたないもの，つまりは派生語ではないものを strictly monomorphemic forms と呼ぶが，そのうちで，strictly monomorphemic forms の反対語をもっているもの，たとえば good, bad, evil ; long, tall, short ; hot, cold ; large, small ; hard, soft ; 等は否定辞がつかない。彼のこの制限は一部，動詞にも適応できる。

(82) go, come ; sell, buy ; give, take ; induce, deduce ; open, shut ;

(82)のそれぞれの組は，各々二つの語の間の関係は，上述の(77)(79)よりも，密接である。(77)が否定辞派生の反対語と派生してない反対語の両方をもつのに対し，(82)は否定辞派生はできない。否定辞派生の制限について，動詞が形容詞と違うところは，dis-, un- の欠性という意味であり，反対動作がある場合には，欠性という性質をもつ場合があるが，すべてが欠性になるのではない。一方，欠性は，必ず反対動作になる。たとえば，buy は sell の反対動作であるが，それは欠性を意味しない。又，destroy は make に対して欠性という性質をもっていて，反対動作になる。

これらの制限のわくの中で，un-, dis- は，動詞の lirving prefix と

してかなり自由に，派生語を作っている。

注

1 *The Philosophy of Grammar*, CHAPTER XXⅣ, *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part Ⅴ ; *Svntax* PP456—458

2 この場合否定のかかる語は，He, open, the window のすべてであるが，ここでは主動詞にかかる場に限って考えてゆく。

3 Klima, "Negation in English" P294

4 *MEG.* Ⅳ. P466

5 "Affixal Negation in English and Other Languages"

6 *MEG* Ⅳ. P479

7 "Affixal Negation in English and Other Languages" PP43—44